

寒中の芽

能村 研三

地べたの句

書斎の袖の柱に今年も「俳句の日めぐり」を掛けた。忙しくて、何日か一緒にめぐることもあるが、宇多喜代子さんの鑑賞文を合わせて読むのが毎日の楽しみでもある。三月五日は啓蟄で先師登四郎の句が掲載されている。

啓蟄や地べたてふ語のなつかしき
登四郎

この日の、宇多喜代子さんの鑑賞は次のように書かれている。

「暖かくなり、冬ごもりをしていた虫や動物たちが目覚めて出てくると。これが啓蟄です。啓蟄の話をしていて、誰かが『地べた』と言ったのでしよう。昔は何かにつけてよく使った言葉だが、そんな郷愁を感じさせます。」

地べたは、地面のことだが、俳句では「地面」という言葉で詠むよりも「地べた」で詠んだ句の方が圧倒的に多いように思う。

「地べた」とは、辞書によると土「地の表面。地面のくだけた言い方」とある。さらに「すきまのないさま」一

柚道の細きを行くも恵方かな

初 茜 海 鷗 十 字 の 翼 張 る

読 初 に 朱 線 ま み れ の 古 書 を 買 ふ

初 刷 は 単 襲 の 折 り 目 かな

鏡 餅 罇 の は し り は 吉 兆 かな

松 籟 を 身 ぬ ち に 鎮 め 弓 始

捨 灰 の 土 に 育 ち し 芽 水 仙

見 霽 か す 岬 こ こ ろ に 寒 稽 古

皿 小 鉢 使 は ず 捨 て ず 寒 土 用

寒 中 の 芽 に し て 朴 は 天 を 指 す

面に広がっているさま」と説明がある。地（地面）のありようを強調して、広がりを表す「べた」を付けて「地べた」というようになったのだと言われている。

地べたを詠んだ句を探してみたらこんな句があった。

春蒔きの種ひと揃ひ地べたに置く
本宮 哲郎

正月の地べたを使ふ遊びかな
茨木 和生

荒縄が地べたをすべりくる小春
藤本美和子

石段のはじめは地べた秋祭
三橋 敏雄

爆竹を痛がる地べた春近し
小川 軽舟

私の句にも「地べた」の句があった。

腕立て伏せ地べたに尽きて

あたたかし 研三

この句も季語は「あたたかし」で登四郎の句と同じ三月の句である。

能村 研三